

【今日の説教から】

今日も主の復活の日に起こった事を読んでまいりましょう。

「わたしたちは主にお目にかかった」と何度も何度もトマスに語る他の弟子たち。それはあなたもそこにいれば良かったのに、イエス様に会えたのにと言わんばかりです。

しかしトマスはトマスで、逃してしまったチャンスはどうにもならないが、イエス様に出会ったと言いながらほかの弟子たちはどうしてそんなに周りを恐れてびくびくしているのかという不満もあったことでしょう。

やはり集いには一人一人皆が必要であるという事が教えられます。互いに助け合い、補い合って一つの群れが出来上がっていると教えられるのです。誰かがいれば、誰かがいなくても大丈夫というわけではないのです。教会には、トマスの洞察力と、一度見たらもう迷わないという彼の一本気の性質が必要でした。そして教会には、どんなに危険が及んでも、望みが薄くなつたように思っても、それでも主に期待し続けて礼拝に出席し続ける兄弟姉妹が必要です。

イエス様は彼らに3度「安かれ」と語られ、平安があるように、そして調和があるようにと語られました。そして「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と語られました。

「信仰を持ち続けなさい」と語られました。見ずとも信じる。目に見える状況によらず、目に見えないが確かにおられ、救ってくださる方を信じる。神様に信仰を持ち続けたいと願います。

皆様おはようございます。今日も主の復活の日の出来事を読み進めてまいりましょう。

今日はヨハネの福音書から、あのトマスの出来事です。

「疑い深いトマス」という事でよく知られるこの箇所ですが、トマスについて、ラザロの墓をイエス様がお尋ねになられた時の出来事が思い出されます。

ヨハネ 10:22 そのころ、エルサレムで宮きよめの祭が行われた。時は冬であった。

10:23 イエスは、宮の中にあるソロモンの廊を歩いておられた。

10:24 するとユダヤ人たちが、イエスを取り囲んで言った、「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストであるなら、そうとはっきり言っていただきたい」。

10:25 イエスは彼らに答えられた、「わたしは話したのだが、あなたがたは信じようとしている。わたしの父の名によってしているすべてのわざが、わたしのことをあかししている。

10:26 あなたがたが信じないのは、わたしの羊でないからである。

10:27 わたしの羊はわたしの声に聞き従う。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしについて来る。

10:28 わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。

10:29 わたしの父がわたしに下さったものは、すべてにまさるものである。そしてだれも父のみ手から、それを奪い取ることはできない。

10:30 わたしと父とは一つである」。

10:31 そこでユダヤ人たちは、イエスを打ち殺そうとして、また石を取りあげた。

10:32 するとイエスは彼らに答えられた、「わたしは、父による多くのよいわざを、あなたがたに示した。その中のどのわざのために、わたしを石で打ち殺そうとするのか」。

10:33 ユダヤ人たちは答えた、「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としているからである」。

10:34 イエスは彼らに答えられた、「あなたがたの律法に、『わたしは言う、あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。

10:35 神の言を託された人々が、神々といわれておるとすれば、（そして聖書の言は、すたることがあり得ない）

10:36 父が聖別して、世につかわされた者が、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『あなたは神を汚す者だ』と言うのか。

10:37 もしわたしが父のわざを行わないとすれば、わたしを信じなくてもよい。

10:38 しかし、もし行っているなら、たといわたしを信じなくとも、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」。

10:39 そこで、彼らはまたイエスを捕えようとしたが、イエスは彼らの手をのがれて、去って行かれた。

10:40 さて、イエスはまたヨルダンの向こう岸、すなわち、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行き、そこに滞在しておられた。

10:41 多くの人々がイエスのところにきて、互に言った、「ヨハネはなんのしも行わなかつたが、ヨハネがこのかたについて言ったことは、皆ほんとうであった」。

10:42 そして、そこで多くの者がイエスを信じた。

11:1 さて、ひとりの病人がいた。ラザロといい、マリヤとその姉妹マルタの村ベタニヤの人であった。

11:2 このマリヤは主に香油をぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女であって、病氣であったのは、彼女の兄弟ラザロであった。

11:3 姉妹たちは人をイエスのもとにつかわして、「主よ、ただ今、あなたが愛しておられる者が病氣をしています」と言わせた。

11:4 イエスはそれを聞いて言われた、「この病氣は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。

11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

11:6 ラザロが病氣であることを聞いてから、なおふつか、そのおられた所に滞在された。

11:7 それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行こう」と言われた。

11:8 弟子たちは言った、「先生、ユダヤ人らが、さきほどもあなたを石で殺そうとしていましたのに、またそこに行かれるのですか」。

11:9 イエスは答えられた、「一日には十二時間あるではないか。昼間あるけば、人はつまづくことはない。この世の光を見ているからである。

11:10 しかし、夜あるけば、つまずく。その人のうちに、光がないからである」。

11:11 そう言われたが、それからまた、彼らに言われた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。

11:12 すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのでしたら、助かるでしょう」。

11:13 イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。

11:14 するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザロは死んだのだ。

11:15 そして、わたしがそこにいあわせなかつたことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう」。

11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。

確かに今日の箇所を見ますに、彼は、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」と言っていましたので、相当頑固で疑い深いと思われるのですが、しかし一方で彼は、他の弟子たちが今までエルサレムの近くに戻れば危険が及ぶと心配した中でも、主の仰せならば何をたじろぐか、行って、死ぬべくならば主と共に死のうではないかと、勇猛果敢に語る人であったという事を思い起こしたいと思うのです。

20:19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。

20:20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。

他の弟子たちは日曜日の夕方共にいましたが、ユダヤ人たちを恐れて戸を閉めて集っていました。勇猛果敢なはずのトマスの姿はありません。どうしたのでしょうか。彼がいたら恐れるなと声をかけていたのかもしれません、彼はそもそもそこにいませんでした。どうしていなかったのでしょうか。彼はもしかしたら参加していた人よりももっと臆病だったのでしょうか。しかしその理由は記してはいません。そんな中、イエス様は弟子たちの真ん

中にいらっしゃり、「安かれ」と言われました。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになられ、弟子たちは主を見て喜びました。

20:21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。

20:22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖靈を受けよ。

20:23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。

イエス様はまたも弟子たちに「安かれ」、平安があるようにと言われ、息を吹きかけて言わされました。

「聖靈を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」

イエス様は実に重要なことを語られました。それは人の罪を赦すという事でした。

1か月後の6月8日はペンテコステですが、聖靈を受けるという事と、人の罪を赦すという事がセットで語られています。聖靈を受けることにより、私たちは父なる神様の御心を悟り、キリストの御名によって祈ることが出来るようになります。キリストの御名によって祈るという事は、キリストによって祈るという事です。キリストによって祈るという事は、キリストを信じて、キリストが望むことを私たちも願って心を一つにして祈るという事です。

ヨハネ 14:12 よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。

14:13 わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。

14:14 何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。

14:15 もしあながたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。

14:16 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。

14:17 それは真理の御靈である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

14:18 わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。

14:19 もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがた

はわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。

14:20 その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。

14:21 わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」。

1 ヨハネ 5:1 すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生れた者である。

すべて生んで下さったかたを愛する者は、そのかたから生れた者をも愛するのである。

5:2 神を愛してその戒めを行えば、それによってわたしたちは、神の子たちを愛していることを知るのである。

5:3 神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない。

5:4 なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。

5:5 世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか。

5:6 このイエス・キリストは、水と血とをとおってこられたかたである。水によるだけではなく、水と血とによってこられたのである。そのあかしをするものは、御靈である。御靈は真理だからである。

5:7 あかしをするものが、三つある。

5:8 御靈と水と血とである。そして、この三つのものは一致する。

5:9 わたしたちは人間のあかしを受けいれるが、しかし、神のあかしはさらにまさっている。神のあかしというのは、すなわち、御子について立てられたあかしである。

5:10 神の子を信じる者は、自分のうちにこのあかしを持っている。神を信じない者は、神を偽り者とする。神が御子についてあかしせられたそのあかしを、信じていないからである。

5:11 そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるということである。

5:12 御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。

5:13 これらのこととあなたがたに書きおくったのは、神の子の御名を信じるあなたがたに、永遠のいのちを持っていることを、悟らせるためである。

5:14 わたしたちが神に対していだいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。

5:15 そして、わたしたちが願い求めるることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである。

5:16 もしだれかが死に至ることのない罪を犯している兄弟を見たら、神に願い求めなさい。そうすれば神は、死に至ることのない罪を犯している人々には、いのちを賜わるであろう。死に至る罪がある。これについては、願い求めよ、とは言わない。

1ヨハネ5章では、祈り求めよとの話のクライマックスのところに、「罪を犯している兄弟を見たら、神に願い求めなさい」とあります。ヤコブの手紙にはこうあります。

ヤコブ1:15 欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。
またローマ6章にはこうあります。

6:23 罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。

ですから、死に至らないために熱心に兄弟のために祈りなさいとあります。兄弟のためにという事は、教会の信徒のことを指すわけです。

20:22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。
20:23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。

ここでは「だれの罪でも」とありますから、教会の信徒のみを指すものではないように思います。

私たちは聖霊を与えられ、罪から死から救い出すための情熱と使命とを受けるのです。赦すとか、赦さないとかありますが、それは文字通り私たちが許せば天でもゆるされ、私たちが許さなければ天でもゆるされないというよりかは、私たちがその人を恨む気持ちを持ち続けて神様の赦しを伝える業を控えることのないようにして、誰をも赦される神様のお気持ちを深く聖霊に聞き、わが心として、どんな人にも神様の救いと赦しを語り、そうして救いが訪れるように使命を果たしなさいという意味であり、私たちがその神様の赦しと救いの御業を伝えることをしなければ、私たちが愛さずに、赦さずに、その技を拒むのならばその人の罪はどうやって許されるだろうかと、私たちの宣教に救いと赦しがかかっていると語られていると理解すべきなのではないでしょうか。

1テモテ2:4 神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。

20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼ら

と一緒にいなかった。

20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。

「ほかの弟子たちが、彼に『わたしたちは主にお目にかかった』と言うと…」とありますが、新約聖書原典のギリシャ語のニュアンスでは、他の弟子たちは「わたしたちは主にお目にかかった」とトマスに言い続けていたという意味になります。トマスはあのような一本気の人、勇猛果敢な人でしたから、自分がその時に一緒にいたのが悔やまれるとともに、何度も何度もこれ見よがしに「わたしたちは主にお目にかかった」とトマスに言うほかの弟子たちに対してのいら立ちもあったのではないかでしょう。そして彼は「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」といったのです。

みんなはイエス様を見た、見たというが、それじゃあどうしてそんなにユダヤ人たちを恐れてビクビクしているのか。見た見たと言っているが雁首揃えて本当に見たのか。幻ではなかったのか。良く近づいて、本当にイエス様だと、しっかりと確認したのか。そこら辺の確認があいまいだったから、出会った出会ったというばかりで、全然身になっていないのではないかと、彼はそういう目でほかの弟子たちを見ていたのではないかでしょうか。

群れには確かに彼のような用心深い、徹底した、決して感情に流されず、しっかりと観察を経て、一度信じたら命を懸けてでも信じ通す、従い通すという個性が必要なのです。教会にはそれと同時に、怖い怖いと言いながらも、危険を感じながらも、ひっそりとでも、集まることをやめずに集い続ける人も必要です。誰がいれば、その人さえいれば大丈夫で後の人々はいらないという事ではなくて、一人一人みんなが必要なのです。そして一人一人の持ち味を重ね合わせて強い教会、強い集まりが出来上がるのです。

20:26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。

20:27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

3回目の「安かれ」です。安かれという言葉の意味には、平和とか平安という意味があり、それと同時に、「調和・ハーモニー」という意味もあります。平和があり、調和がある。それこそが平安です。教会の交わりの中にあっては、ただわたくしに平安があればいいのでは

なくて、私たちに調和があり、平和があり、私たち全体に平安があるという事が大切なのです。

天からのマナを集め、互いに分け与えたように、その日その日の分を分け隔てなく与えてくださる神様のお恵みが群れ全体にありますように。そして世界全体にその神様の平和と調和と平安がありますように。貧しき方々が報われる世界となりますように。

出エジプト記 16:15 イスラエルの人々はそれを見て互に言った、「これはなんであろう」。彼らはそれがなんであるのか知らなかったからである。モーセは彼らに言った、「これは主があなたがたの食物として賜わるパンである。

16:16 主が命じられるのはこうである、『あなたがたは、おのおのその食べるところに従つてそれをを集め、あなたがたの人数に従つて、ひとり一オメルずつ、おのおのその天幕におけるものためにそれを取りなさい』と」。

16:17 イスラエルの人々はそのようにして、ある者は多く、ある者は少なく集めた。

16:18 しかし、オメルでそれを計つてみると、多く集めた者にも余らず、少なく集めた者にも不足しなかった。おのおのその食べるところに従つて集めていた。

16:19 モーセは彼らに言った、「だれも朝までそれを残しておいてはならない」。

16:20 しかし彼らはモーセに聞き従わないで、ある者は朝までそれを残しておいたが、虫がついて臭くなった。モーセは彼らにむかって怒った。

16:21 彼らは、おのおのその食べるところに従つて、朝ごとにそれを集めたが、日が熱くなるとそれは溶けた。

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

見ないでも信じることが出来るように。見ないでも信仰を持ち続けることが出来るように。今私たちは主と顔と顔とを合わせることがなくとも、信じ続けることが出来ますように。信仰を持ち続けることが出来ますように。聖霊によって導かれ、世界に赦しと救いと調和と平和と平安をもたらすものとして、どんなに見える世界においては困難や危険があろうとも、教会の調和と一致とによって神様からの負託にこたえていくことが出来るように。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのこと書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

イエスキリストこそ、私たちに命を与える救い主、贖い主、平和の君、不思議な助言者(ワンドフルカウンセラー)です。私たちも命を与える救い主と共に生き、命に生かされ、命を伝えていきたいと願います。

イザヤ 9:6 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。

9:7 そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもって／これを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。

「安かれ」と三度語られ、息を吹きかけくすぶる信仰心を燃え立たせ、互いに助け合って補い合って進みなさいとお励まし下さいまして、ありがとうございます。見える状況がいかになろうとも、信じる心をいつも失わないようにとのお励ましもありがとうございます。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン